



TITLE:

静脩 Vol. 3 No. 3 (1966.8) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 3 No. 3 (1966.8) [全文]. 静脩 1966, 3(3)

ISSUE DATE:

1966-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65914>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1966年 8月

Vol. 3, No. 3

ご あ い さ つ

安 戸 圭 一

先般の図書館商議会で、はからずも館長の要職に選挙せられ、内規に従って、総長より委嘱、7月25日付で任命の発令があった。自然科学系教授としては、本学最初の館長であるが、旧帝国大学にあっても、現在、東大、阪大、九大などに例があり、先輩の堀江前館長からも、そんな意味も含めて激励されているので、何とか責をはたしたいと思っている。

生来理科系の、実験を主とした学問をやっているもので、図書については、門外漢とは言えないとしても、大した知識はない。しかしこの方は、先輩、同僚各位のご援助に待つことにするが、工学部の知識を生かした方面で、何か技術的に役立つ方面にも働らいて見たいと思っている。

差当っての目標は、学生諸君一般が利用する閲覧室を気持ちよくすることである。私所属の工学部工業化学教室のご好意で、飲料水冷却装置をゆずっていただくことになったのが、小さいことであるが、先ず手はじめである。目下各方面にご援助をいただくようお願いしているのは、200坪のあの部屋に冷房装置を入れることである。何分莫大な金額になることなので、困難も多いが、取敢えずの要務と考えている。

心 の 痕 跡

桑 原 武 夫

ジャン・ジョレスは、あらゆる本を読み、それをことごとく忘れた偉い人であった。

アランの著作のなかに、こうした言葉を見出したとき、私はおどろき、そして嬉しかった。私は小中学時代は恐らくクラスでも、一、二をあらそう読書家だった。高校に進んでからは山岳部に入り、やや戸外派に転じたので、読書の時間は減ったが、趣味は変らなかつた。フランス文学で文学士になってからも、読書とは専門以外の本を読むことと心得て、濫読はやめなかつた。

しかし、一方、“知行合一”の思想が私の心のなかで次第につよまっていた。この憬れは前からあったのだが、わずかながらの登山行為とマルクス主義に動かされたジャーナリズムとの影響があったかも知れない。ともかく、書物によってえられた知識ないし知恵は人生での実践に役立って、はじめて価値があると考えたいのであった。これには人生に役立たぬ本はあまり読まなくてもよい、という含蓄があるので、怠け心に口実をあたえもし

たが、むしろ問題は、たとえば考古学の本とか中世の詩とかに没入する、読書における無償のよろこびといったものと、知行合一思想とをどう調和させるかであった。その解決に深刻に悩んでいたわけではない。ただ、その矛盾は心の底にいつもひそんでいたに違いない。アランの言葉が私をよろこばせたのは、その心の底に達したからである。

本は多方面にわたって、なるべくたくさん読むがよい。多方面に触手をのばすということ自体が、つかみとるものが何であっても、私たちの心をひろげる。読んだ内容をむりに覚えようとするには当たらない。忘れてしまってもよいのだ。しかし、心をこめて、夢中になって読んだものは、必ず心に痕跡をのこさずにはおかない。そうした痕跡線の交錯のえがき出す模様が、すなわちその人間の知的作業の基本形をなすのではなからうか。動物の脳のしわが多いほど高級とされるように、読書痕跡線も多いほどよいのである。私はおおよそこのようにアランの言葉を自己流に解した。

一般に、ヒューマニズムは、どこかに、科学的証明の彼方にある楽天主義をふくむものであるが、このヒューマニストの古典主義者アランの言葉も、神秘主義につらなる楽天主義をふまえているように思われる。雑学に終始して一生ロクな仕事をせぬ人間も多いのに、知的には“フランス革命史”の大作をのこし、行的には非業の死にいたる社会主義運動に挺身したジョレスひとり为例にとって、アランは生体的読書の無用の用を説くのである。

このテーゼの眼目は、私流にいえば、心に痕跡をのこす読方ができるか否かにある。この痕跡は今の知識心理学では十分説明できそうにないが、それは本の内容の細部ではなく、パターンのようなものと思われる。古代殷文明の本を読んで、国王の名とか、首都の位置とかではなく、史上最大の殉死を生むその宗教政治的権力の何とも表現しがたいような無気味さの感覚、それが心にのこるのである。その痕跡の有無が特定の条件の下では、きつと何らかの相違となって作用するにちがいない、と私は思っている。

美しい風景もまた心に痕跡をのこすのではなからうか、と実はひそかに考えている。まだ何一つ確認はない。しかし、ヒマラヤの巨峰の朝やけの神々しさ、真黒の岩壁にぶちあたる怒濤、眼路はるかな緑の牧野、こうしたものにうっとりと眺め入るとき、それが私たちの心に何らかの痕跡をのこし、それがその後の生活に作用しないとしたならば、人生は無意味のように思われる。人生とはこうした痕跡の堆積をいうのであろうから。

(人文科学研究所教授)

~~~~~ 穴戸新館長を迎える

本学図書館の改善につくされた堀江館長の任期満了に伴い、その後任として、工学部の穴戸圭一教授を新館長に迎えた。本学では自然科学系からの館長就任は初めてのことであり、画期的なこととして、いよいよ図書館近代化の進展に期待がよせられている。

京都大学雑誌総合目録の編さんに着手

全学の雑誌総合目録は、自然科学欧文編が1965年2月に刊行され(静脩第4号既報)、学内から好評を受けたが、今年度はそれに引続いて人文科学欧文編と、自然科学和文編、人文科学和文編の3編を刊行することになった。これは昭和41年7月1日現在、本学に所蔵する上記の雑誌について、調査を行ない収録するものである。目下各部局図書室の協力を得て、原稿カードの作成にとりかかっている。欧文編は本年末、和文編は来年3月に刊行の予定である。これが完成をみた暁には、本学の雑誌はさきの自然科学欧文編と合して、一応全部網羅されることとなり、長年の懸案が一举に解決されて、研究者に大きな利便をもたらすであろう。

研究者の立場から

まつお・たかよし

研究所生活も13年になるが、それは私にとって図書館通いが13年つづいていることを意味する。歴史が浅く、したがって蔵書の不備な（もちろん東方文化研究学院以来の中国関係文献は別だが）人文研では、付属図書館はじめ各学部の図書の厄介になるよりはかはないのである。こうして、今頃では、付属図書館などは、³「勝手知ったる他人の家」のようになってしまった。

この間、たしかに図書館のサービスはよくなった。もとは付属図書館の書庫には入れなかったし、学部の図書室も、部外者には決してよい顔をしなかった。今でも忘れないが、ある学部の図書室員に、人文はよその学部の人に貸さないのに、借りに来るとはあつかましい、と面と向っていわれたことがある。仕方なく、いろんなコネをたぐって、他人名義で借出したものだ。これが五・六年前にすっかりかわって制度上にもずい分利用しやすい状態となり、係員の態度も変わった。こちらは恐縮するほど親切に扱われることがしばしばあるくらいである。

ただ、設備の点について、甚だ不満足なことが一つある。付属図書館はじめ、各学部の書庫がせまくなり、利用度の少ない図書を旧書庫と称する土蔵造りの別棟に収容していることが、それである。筆者のような、図書館利用の玄人（くろうと）にとっては、この別棟入りの図書がなくては仕事にならない。そこで注文を受けた係員は、雪が降ろうが雨が降ろうが、旧書庫に行って、大冊の新聞・官報・人名録の類を選び

出さねばならない。ことに冬など、旧書庫の寒さは格別である。電燈の光も極度に乏しい。こんな事情を知っている当方として、甚だ気がひけるのである。図書館がたんに学生のためのみでなく、研究者のために存在するものならば、すみやかに、この事態は改善されねばならぬはずである。せめて新聞だけでも図書館に移し、書庫の中で読めるようになれば、利用者と職員双方にとって、また運搬するごとにいたむおそれの多い新聞の寿命にとって、どれだけ助かるかわからない。

これというのも、付属図書館に限らず、どこの学部の図書室でも、大学の機構の中で余りにも冷遇されているからだと思う。付属図書館の書庫の増築のうわさを聞くことすでに久しい。ところが、いまや学内に雨後の筍のように、大へん立派なビルが立ち並びつつあるのに、付属図書館だけは旧態依然である。研究の基幹部分たる図書館が、設備不完全のまま放置されていることは、何かわが京都大学の文運を象徴しているようにみえる。大学当局の英断を望む。

このほか蔵書の補充、たとえば雑誌の欠号を埋める、というようなことも大学の図書館たる以上綿密にやってもらいたいことである。夢を語れば、各学部の図書室は廃止して、中央に資料館をかねる一大図書館を建設し、図書館職員の養成所や、図書館学の大学院コースなど付置するところまで行ってほしいものだ。蔵書と館員の集中化により、現在と同じくらいの図書関係予算でも、格段の効用を発揮することができるだろう。一つ70周年記念事業として、それが無理なら80周年をめざして、計画してみませんか。大体育館みたいなものを建てるより、よほど気がきいていると思うが如何。

（人文研）

本が自分のものになる

鈴木 輝 康

月日の経つのは早く、僕が入学してから一年余りになってしまった。入学当初は膨大な蔵書を大いに活用しようと意気込んでいた。

つい先日、夜遅くなつては朝の講義には差し支えると思ひながらも、読みおわらずには寢床に入りたくはないと思う本があった。一通り読み終えた今、その著者の鋭い洞察、思考方法に感激し、僕はそれをノートを取りつつ読み返している。この本はM・ブランクの著作を図書カードで検索している時に偶然見つけ、この書物を蔵している部局図書室をあちこち尋ねて求めたのだが、ある部局だけ特別に短期貸出しを認めてくれ、毎週その部局図書室に足を運んでいる。この本により自分の思考方法が力づけられ、自分の内に潜んでいた新しい芽が萌えてきたように思える。

若い！それはあらゆる可能性を十分にその内に秘めている。その可能性を芽生えさせ、培ってゆくものが、良き師であり、良き友であり、良き書物であって、いずれもそのめぐりあわせは全く偶然的な“運”に支配されている。その運に出合う機会を多くするためにも若い学徒には、できるだけ多くの書物を開放すべきではなからうか。何時、何処で、開いた頁の行間からすばらしい着想が生じてくるか解らない。これは大きなエネルギーを内に潜め、柔軟で、比較的頭の回りの早い、若い私達に期待されてもよいと思われる。

部局図書室の蔵書はその部局での研究のために各部局毎に割り当てられた予算で購入されたものであるから、部局関係者を優先すべきであるが、他学部生の読みたい本を書架に淋しく眠らせておくのは何と残念なことか！求めている者にこそ、このような本を目覚めさせ、活動させる機会を与

えるべきであると思う。書物は読みたいと思った時にじっくり読んでおかないと、その時期を逸しては、ついゆっくり読む機会を失い、仕事のためにのみ読むことになって、書物を読みつつ、思索する余裕はなく、そこには何ら新しい芽は存在し得ないと思う。

しかし、僕らの権利だけを主張するのではいけないと思う。公共の図書は自分のものでもあり、他人のものでもある。自分のものとして大切に扱う反面、自分が強すぎて、他人のものも自分のものとしてしまわないように、書物の中に書き込みを入れたり、期限内の返還に遅れることなどには十分注意しなくてはならないと思う。そこで、各部局図書室において定められた期限内に必ず返還し、部局内で必要になった時にはすぐに返すとか、また本の顔に傷をつけないなどの責任ある態度を取ることで、短期間の貸出しは認められるのではないか。新しい建物の中には新しい風が吹き込んでいるはずであるのに、なお古い封建の空気が溜っている。その空気を新風に変えるために、私達各自が責任ある態度を取ることで、また各部局も相互に施設を開放し、利用しあうことなどによって大学組織全体の運動とし推し進めてゆくべきではないか。

このようにして読みたい本が自由に借りられる。その上、時には必要と思う箇所をノートに取りながら、また原著と照し合わせつつ読むこともある。ノートを取ることは目だけでなく手でも学び取り、あいまいであったものが具体的に解り、内容も詳しく検討されて著者の語ろうとしているものが自分の体を通して、実感として理解でき、自分のものになったという感じを強くする。このようにして読んできて、論述の高まりを感じ、こころ思う最も肝腎な部分が切り取られているのを見いだした時ほど腹立たしいことはない。複写室もあることだし、複写できなければ自分の手で写し取ればよい。必ずその効はあるはずだ。一冊の本が真に自分のものとなるには、心・身・頭の鍛錬が必要に思われ、焦らず、休まず、本を自分のものにしてゆきたい。(教養部)

資料紹介

参考室に備え付けの資料のうち、使えば便利だが、それを知らぬ人が案外多いものについて2, 3述べてみよう。

雑誌記事索引（国会図書館編） あるテーマに関する最近の文献にどんなものがあるかを知りたい時は、まず本書の利用が考えられる。これは月刊の索引誌であって、科学技術編（昭和25年1月～）と人文科学編（昭和23年9月～）とに分れている。前月までに発行の諸雑誌に掲載された学術論文を、毎号各編約4000ずつ主題別にリストアップし、著者、題名、掲載誌を挙げてある。本館には科学技術編第2巻、人文科学編第4巻（いずれも昭和26年）以降を所蔵している。これによって目的の文献の掲載誌がわかれば、自館の目録または文部省大学学術局編さんの「学術雑誌総合目録」でその掲載誌の所蔵館が判明するから、これを併用して目的の文献に到達できる。

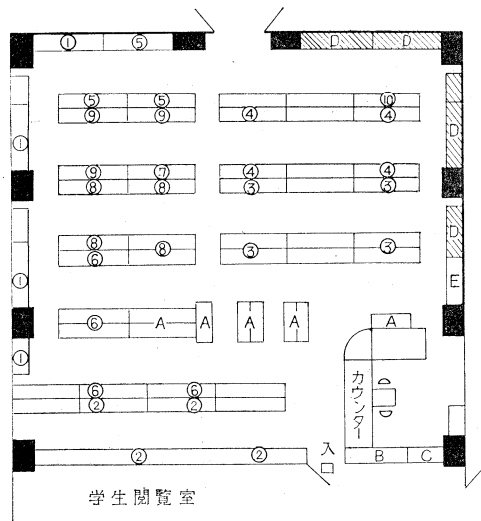
文科系文献目録（日本学術会議編） 上記と類似の資料であるが、日本学術会議第1部（文学、哲学、史学）に属する分野の文献に限られ、昭和20年8月以降の単行書・雑誌に発表された文献をそれぞれ専門分野別に編集したものである。昭和27年に第1編を刊行し現在第17編（昭和39年刊）まで出ている。各編の内容は次の通りである。

1 日本文学 2, 12 西洋文学・語学 3 東洋文学・語学 4 宗教関係学術 5 日本民俗学 6 国語学 7 教育学 8 日本古代史 9 西洋古典学 10 中国哲学・思想 11 美学 13 文化人類学 14 日本近代史・伝記 15 日本人の性格研究 16 倫理学 17 考古学
なお本館には第1編より所蔵している。

開架図書室からのお知らせ

— 指定書の混排と図書排架の移動 —

従来指定書は、一般図書と書架を異にし、別置していたが、利用者の便宜を考慮し、一般図書と混排し、分類順に排列した。それに伴い開架図書室の排架が、下図のように、大移動したのでお知らせします。



1. 宗教・哲学・教育
2. 法律・政治
3. 経済・社会
4. 文学・語学
5. 歴史・地理
6. 自然科学
7. 医学
8. 工学・芸術
9. 産業
10. 全書・叢書
- A. 新着雑誌
- B. 年鑑・白書
- C. 小型辞書
- D. 法・経製本雑誌
- E. 教官文庫



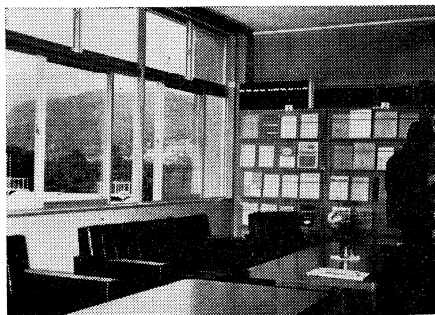
理学部・教室図書室 (2)

今回は最近新築された教室の図書室二つを紹介しよう。

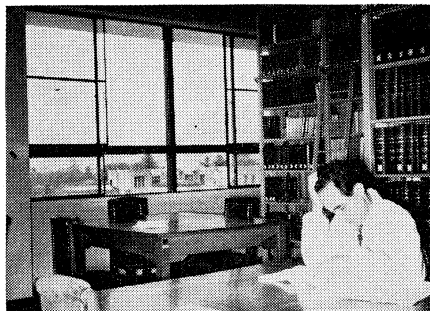
物理教室は、1929年に建てられた旧館をこわして新たに今の5階建が出来た。教室の歴史と共に、図書室のそれも古く、現在約3万冊以上の蔵書がある。

デラックスだといわれている新図書室は、横8m、縦21mの閲覧室を持ち、横に3層の書庫がついている。閲覧室の片隅には、ガラス張りの事務室があり、その前にカウンターがひかえている。閲覧室は総計48人収容出来、他に雑誌コーナー、肘応接セットが置かれ、読み易いよう、利用者本位に設計されている。窓外に目をやると、比叡山がすぐ近くに見られ、雨あがりの緑は格別の趣がある。ここに引越して以来日が浅く、貸出規定がまだ決らない状態なので、暫定的に従来通りの方式を採用している。利用者は外部の人も多く、係員はてんこ舞の忙しさである。今のところ外部の人には複写だけの貸出を認めており、今後この方針が続けられるであろう。

今後の大きな課題は、この施設にふさわしい立派な図書室に育てることである。施設だけが立派で、それだけで利用者が利用しやすくなるであろうか。また、大きくなればなるだけ利用者の利害が一致にくく



なるが、本当によい図書室にするにはどうすればよいのか。このような点について、皆さまの御意見を聞かせていただければ幸いです。



化学教室の歴史は古く明治30年の創設である。昨年5月に新しい化学教室が出来上り移転を完了した。新建築では総面積が旧館より縮少しているにもかかわらず図書室に対しては大きな考慮がはらわれた。以下図書室の現状を簡単に紹介しよう。蔵書数18,000冊、年間予算(昭和40年度)300万円。

第1図書室(516号室、158m²)は書棚が96m²を占め、残り64m²に閲覧机を置き30名まで読書できるようになっている。また新着雑誌約100種類を展示している。定数表、全書なども在庫し、この他に寄贈の雑誌や研究所報告など数百種類在庫している。図書掛はここに常駐して図書事務すべてを行なっている。5階の北側にあるので比叡、蓬来、鞍馬、花背の山々が遠望できる。

第2図書室(526号室、32m²)は1800年代から1930年代までの貴重な雑誌を保管している。貴重な雑誌であるので利用者は特に図書掛に申し出ることになっている。

第3図書室(529号室、32m²)には主として講義参考書などの単行本が置いてあり学部学生の利用が特に多い。この部屋は5階の南側にあつて大文字山、愛宕山、晴天には遠く生駒、天王山が一望できる。

以上が新しい化学教室図書室である。職員は2名であるがその内の1名が中央事務兼務のため他の1名は日常の雑用、閲覧者へのサービス、毎日のように送られてくる雑誌の整理、ゼロックスの業務など多忙な日々であるが利用者の便に供するため努力している。

あとがき この号は、編集の時期が丁度猛暑のさ中にあたりましたが、文字通り汗の結晶としてどうやら無事に刷り上げることが出来ました。これも、学問を愛し、図書館を愛する多くのかたがたの、熱心な御寄稿、暖かい御支援のたまものです。厚く御礼申し上げます。

今回の東西南北には、歴史の古い図書室のうち、新築されたものを取り上げました。ここにも、まだ幾つかの問題が残されていますが、今後の拡充、発展を期待いたします。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 3, No 3 (通巻12号)1966年8月25日発行・発行人岩瀬敏生
発行所 京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 電表77-8111 (内線) 2220-2238